

経営と健康

第1回

栄光と悲劇の偉人「西郷隆盛」

講談師 一龍斎貞花

今年（維新一五〇年）、そこで維新第一の功労者で人気者の西郷隆盛が、大河ドラマの主人公となったのである。雄大な桜島の風景が画面を飾ります。撮影はソニー。昨年の女城主直虎と来年の大河ドラマの撮影は池上通信機。タイトルに社名は出ないがNHKも各社を起用している。

隆盛は、文政十年（一八二七）十二月七日、薩摩藩、下から二番目の下級武士、西郷家の四男三女の長男として、城から遠い下加治屋町にて生れる。

この加治屋町からは、大久保利通、吉井友実、伊地知正治、甥の大山巖、弟従道、東郷平八郎と、維新、日清日露戦に活躍した人が出ています。

こうした人物を輩出したのも、大人は関与しない青少年同士の相互鍛錬を町会で行った郷中教育にありと。六歳〜十五歳、十五歳〜二十五歳と、長老、妻帯した先輩が若者をしごく。朝六時から、文字の読み方、暗唱、庭・

木戸の掃除、家事手伝い、

八時から、角力、競争、斥候、手刀斬り、

十時から、郷中の誰かの家で復習やかるた、

十六時から、薩摩必殺の示現流、

十八時、帰宅以後外出禁止、

年長者が、年少者を徹底的にしご

く。「相手への思いやり、嘘をいわぬ

忠孝の道、おくれをとらない、弱い者

いじめをしない。」特に強調したのが

「負けるな」

会津も人としての教育「仕の誓い」、

幼児から教育した「ならぬことはなら

ぬ」の教え、さらに藩校日新館での指

導も。

薩摩つば精神、会津魂ともに、教育

あればこそ強い人格形成を成した。

幼名小吉、元服して吉之助。明治二

年通称をやめて名前を届けることになつた時、吉井友実が父吉兵衛隆盛の

名を言つてしまい、隆永のはずが隆盛

になつてしまった。幕末の戦いの時、

一般に隆盛と言っているが本当は吉之

助、号を南洲。南洲遺訓も有名。

一七九cm、一〇八kg、豪快だが酒

は飲めずカステラ、鰻の蒲焼が大好

物。少年時代から郷中のリーダー

格。十三歳の時、他の郷の少年と争つ

て右腕の筋を斬られ刀が振るえなく

なり、以後学問を好み、十八歳の時

「郡方書役助」。

領内の年貢調査助手。役人は、裕福

な農民から接待、目こぼし収穫高に目

をつぶり私腹を肥やす。その一方年貢

の治められない者から容赦なしに厳し

く取り立てる。農民の窮状を見て廻り、

家計を助けながら援助を惜しまない。

お由羅騒動

藩主斉興の側室お由羅は、家督は正

妻の産んだ長男斉彬と決まっていたが、自分の産んだ久光を後継者にした

いという相続争い。

斉興の祖父重豪は文化人で、江戸、

京、大坂の文化をどんどん取り入れ、

それが財政難に。家老調所笑左衛門が

密貿易、厳しい年貢の取り立てで建直

し、斉興派として、藩政を正そうとす

る者を処罰。西郷に罰はなかったが、

大久保の父は流罪、正助も謹慎となつ

てしまった。

斉彬派が処罰されるのを見た、福岡

の黒田斉溥、水戸の徳川斉昭、越前の

松平春嶽、伊予の伊達宗城、老中阿部

正弘等開明派の力で、斉彬は四十三歳

でようやく藩主に。吉之助二十五歳。

斉彬は江戸屋敷にいたから、右の開

明派有力者と交際出来たわけで、もし

国元にいたらどうなったか分からない。

吉之助は、斉彬を尊敬し藩政改革、

農政に関する意見書を度々提出。これ

が目にとまり、参勤交代江戸行きの一

員に加えられ、御庭番に登用され、隠密、情報収集、主人の使者として秘密

裡行動。江戸で水戸の藤田東湖、越前の橋本左内と交流し教えを受け、時流を見抜く目を養っていくことが出来、東湖は「我が志を継ぐ者はこの青年」と期待し目を掛けています。

雄藩集合による統一国家構想を持ち、一橋慶喜派として行動していきま

す。海舟が、「薩摩から多くの人材が出たのは斉彬の政策による」と称賛。

トップが身分にかかわらず部下の意見を聴く度量があったこと。意見を取り上げてくれるから部下も育つていく。軽輩の勝麟太郎も意見具申が認められたからこそ、のちの海舟になれたのです。部下に意見提出させるのは人材発掘になるのです。但し、阻止する直属の上司が往々にしていますから、注意が肝要です。

吉之助は、一歳上の伊集院俊子と結婚するも、十一人の大家族、生活苦三人の小姑とあつてみかねた俊子の親が離縁させます。今なら「家族と同居は嫌です」と、結婚しないでしょね。

斉彬は、帰国の途中京都で吉之助を伴い近衛家へ、ここで月照、梁川星巖、頼三樹三郎、梅田雲浜と知り合い、維新への活動へ大きく役立っていきま

す。

斉彬の命を受け、左内らと共に慶喜擁立に動くも、阿部正弘の死と、井伊直弼の強い力で紀州の慶福が、家茂と改め十四代将軍に就任。

名老中といわれた阿部正弘、昼間から若い側室を可愛がり、その無理がたり、肥満の上坐って仕事をしていると座布団が汗でグッショリ濡れていたと申します。精力抜群の方も無理せぬようほどほどにして下さい。

家茂の將軍就任により、斉彬は、慶喜擁立は挫折した上、病のため五十歳で死去。わずか七年の藩主であったが、在任中藩政改革に尽力し、集成館を建て大砲製造はじめ殖産興業を推進（集成館はその後薩英戦争で焼けてしまったが、家老小松帯刀が再建充実させ、軍艦、ガラス、陶磁器他製造し財政を豊かにした）

斉彬は死ぬ前、弟久光を呼んで、「忠義を後見してくれよ」と依頼。

吉之助は、尊敬している斉彬の死で殉死を願うも、清水寺成就院住職月照に諫められ思い止まります。

大老井伊直弼は、一橋派を次々と粛清した安政の大獄。西郷は討手を逃れ

月照とともに薩摩へ。久光は幕府の力を恐れ月照に危害を加えんとした。憂えた吉之助は同志の月照と錦江湾へ抱合い心中。生涯不犯、僧はみだらなことはしないと云いながら、男女ならばともかく、男同士で抱き合い心中はおかしい。西郷と月照はどういう仲だったのかという疑問を持つ歴史家もいる。

月照は死ぬも、吉之助は助かったが、幕府の追求を逃れるため死んだとして、名前も菊池源吾と変え、奄美大島へと流されます。罪人としての流罪でなく、扶持米もあり行動も自由。竜郷の名門龍家の世話になり、島民に同情し、厳しい税の取立てや役人の不正を指摘。島民から尊敬され、愛加那を島の妻にして男の子をもうけ、長男菊次郎は西南戦争に従軍し右足を負傷し切断、その後外交官となり台湾台北県支庁長、宜蘭庁長を歴任後、京都二代目市長に就任している。

久光の子忠義が藩主になったが幼少

のため、親の久光が後見職となり事実上の実権握り、国父と呼ばれるほど。藩主にはなれなかったものの、孫が藩主、倅が実権を握ったのだから、母親のお由羅は泉下でさぞ喜んだことでしょう。

吉之助の幼なじみ大久保一蔵(利通)は、実権を握っている久光が、碁が好きだったので、同じ碁の先生のもので習い、久光が平田篤胤の「古史伝」を探していると聞かや、友人から借りて久光に差し出し、本の中に「京都へ押し出し一芝居打つべきです」と、意見書を。芸は身を助けると言いますが見事売り込みに成功し、大久保は斉彬派であったが、かくして久光の側近にと取り立てられていきます。

時流を読んだ大久保、一本気の西郷との違いです。呼び戻された西郷が、再び沖永良部島に流されるというお話は次回に、ポポン。

